平成15年度購入資料の紹介－中国陶磁器－

髙　橋　隆　博

収蔵品は、博物館の「顔」であるが、「顔づくり」は一朝一夕になるもではない。当館は、数多くの考古資料を所蔵しているので、考古学系博物館とみられているのだが、じつは美術工芸品や民俗資料をも収蔵している。その中には、中国陶磁器も含まれているのだが、ごくわずかを数えるにすぎない。これらを充実し、中国陶磁器を系統的に整備し、展覧に供するために、平成13年度から、中国陶磁器の収集をはかってきた。こうした経緯から、本年度も中国陶磁器を３点購入した。これであわせて12点を数えることとなり、時代的には、漢代から明代までのものが一応は揃ったことになるのだが、もとよりようやく緒についたばかりといってよい。

本年は開設10周年の節目を迎え、記念展として収蔵資料から優品を選りすぐり、４月に「名品展」を開催し、これまで収集してきたすべての中国陶磁器を展観することができたのである。なお、この博物館10周年記念展は、平成18年度に迎える関西大学創立120周年記念事業の一環として企画したものであった。

１、三彩刻花芍薬文双耳壷（遼時代、10～11世紀。高11.2センチ、胴径15.6センチ）

線彫りして文様の芍薬文をあらわした三彩の双耳壷で、遼三彩にしばしばみられる技法と器形である。簡略化された大雑把な芍薬文の線描といい、緑と黄のたがいに流れこむ釉薬といい、遼三彩（遼代の三彩釉の総称）に特有の素朴な作風を示している。芍薬の花を白、葉を緑、地を黄釉としているが、緑釉が流れだし技法の稚拙さがみられるが、逆にそれが一つの景色をなしている。この作例とほとんど似通っているものが、中国・遼寧省博物館に所蔵されている。

遼三彩が研究者の耳目にふれたのは、そう古いことではない。1933年、瀋陽に博物館建設の構想がもちあがり、そこに張作霖など旧軍閥が所有していた文物の一部を陳列することになった。その中に素朴な三彩陶器が含まれていたが、それは唐三彩ともちがっていた。そこで、唐末から五代にかけて、契丹族が遼王朝を興したことをふまえて、これを遼三彩と名づけたのであった。なお、遼は東モンゴル地域で遊牧していた契丹族の建てた王朝（916～1125）で、まず東方の渤海国を征服し、ついで河北省と山西省の北部、さらには西域にまでその勢力はおよんだ。

２、白掻き落し牡丹文陶枕（宋時代、12～13世紀。高9.5センチ、長17.5センチ、幅20.0センチ）

白掻き落しの技法による、いわゆる磁州窯系の陶枕で、植生する一本の樹に二つの牡丹花文

三彩刻花芍薬文双耳壷（遼）

白掻き落し牡丹文陶枕（宋）

をあらわしている。これは、白化粧をほどこしたのち、文様の輪郭を線彫りし、それ以外のところの白化粧を浅く平らにていねいに掻き落して素地をあらわし、その上で透明釉をかけて焼きあげる技法である。この作例では、それほど顕著ではないが、鉄分を多く含む素地の場合、いささか紫色をした暗灰色となり、白化粧とのコントラストが際立ち、それが掻き落し技法の大きな魅力となっている。

白化粧とは、純白のきめの細かい土を水で溶いたもの（スリップ）を素地にかけて白地をつくる技法のことをいい、これを化粧掛けともいう。白化粧につかう白土は、磁州窯系の窯では、鉄分のきわめて少ないカオリン質の岩石をこまかく砕いて、これを化粧掛けに用いた。そのために、磁州窯系の作例は、柔らかい質感をもつものが多くみられる。カオリンは高火度でも溶けにくい性質をもっており、釉薬が溶けても白土は粉のような状態で素地をおおうことになる。

磁州窯とは、中国北部の各地の窯で焼かれた、白化粧の陶器の総称であり、せまい意味では、河北省磁県で焼かれた陶器のことをいう。なお、陶枕は、すでに唐代に三彩の陶枕が作られ、使用されていた。

3、五彩羅漢図皿（明、17世紀前期。径21.8センチ）

雲にのる羅漢像を、五彩といって、濃い青花に赤、黄、緑で上絵つけしたのちに焼き上げた、典型的な天啓赤絵の作例である。

天啓赤絵とは、明末の天啓～崇禎年間（1621～44）に景徳鎮の民窯で焼かれた、いわば粗製の色絵磁器のことで、この時期、国力の衰えとともに景徳鎮への国の保護と統制がなくなり、まるで枷から解き放たれたように、陶工たちは自由奔放で飄逸な意匠を生み出していった。そこに天啓赤絵の大きな魅力がある。

中国陶磁器の赤絵といえば、なんといっても成化年間の豆彩、そして嘉靖年間の金襴手赤絵に指を屈するが、こののちの万暦年間における赤絵の濫造、そして景徳鎮の官窯からの脱落などがあって、これまでのいわば正統的な赤絵は姿を消していった。しかし、民窯となった景徳鎮窯は、染付を基調としながらも、当時の風潮に敏感に反応した意匠、たとえば文人画・山水画などを取り入れていったのである。これは、それまでの万暦赤絵にない大きな特徴となっている。

五彩羅漢図皿（明）